
15. 茅葺き屋根を継承するための異文化間技術交流計画

美山茅葺き研究会
(京都府北桑田群美山町)

I. 活動の背景

現在、日本の茅葺き屋根は危機に瀕している。社会構造の変化により従来の屋根を維持してきたシステム（ゆい）が壊れた結果、家主にとり金銭的な負担が大きくなり、葺き替えが非常に困難な状況にある。その一方で茅葺き屋根がエコロジカルな住宅として見直す動きが出ている。数年前から多くの茅葺き職人や研究者がヨーロッパの茅葺き屋根技術の合理性を調査していたが日本の屋根構造、気候に適しているか否か定かでなかった。そこで美山茅葺き研究会が佐伯家（築100年）を実験台として異文化技術交流計画を実施する事になった。

II. 活動の内容

1999年9月11日～11月21日の間、イギリスの茅葺き職人ロジャーエバンズ氏とアシスタントとして茅葺き職人尾坂 勝氏が「crooking」という技法で葺き替える。美山の技術では50年前のイギリスと同様、縄で縫うことが基本であり、屋根の裏側に手伝いが一人必要となる。「crooking」は金槌で鉄のフックを打ち、鉄の押しボコでヨシを固定する技法である。そのため職人一人で作業が出来る。美山町ではススキを使用しているがイギリスと日本の共通の素材であるヨシをこのプロジェクトでは使用する事になる。「crooking」で使用出来るヨシの長さは160cmまでで、円錐形になる物でなければならない。温暖な日本ではヨシの成長が早く、背丈の低い物を入手するのは極めて困難であるが、幸い宮城県北上川の河口付近のヨシ（熊谷産業）に、該当する物があつた。

●「日英茅葺き技術交流会」（ワークショップ）

（10月2日）

全国の茅葺き職人を対象に実施。（参加者：職人24名、アドバイザー3名、文化庁調査官1名、関係者8名）

3:00 現場（佐伯家）見学

4:00 ワークショップ開始（スライド上映、ビデオ上映、意見交換）

8:00 ワークショップ終了

8:30

| 交流会

2:00

同時平行で10月3日には全国茅葺き民家保存活用ネットワークが「第一茅葺きフォーラム；21世紀の茅葺き技術を考える－英国の茅葺き事情から」を行



作業体験

い、エバンズ氏、尾坂氏、佐伯マギー氏が講演。

●作業体験

- 10月4日 茅葺き職人3名：京都府、奈良県、宮城県
- 10月5日 茅葺き職人2名：京都府、宮城県
- 10月6日 茅葺き職人1名：京都府
- 10月19日
| 茅葺き職人1名：京都府
- 10月29日

エバンズ氏が帰国後この地域特有の棟作りで仕上げる。(茅葺き職人中野 誠氏、尾坂氏)

●資料作成

今後の研究、討論、実験等で活用されることを期待して次の資料を作成した。

1) 作業説明書の和訳

ワークショップの参加者及び茅葺きに興味を持つ人々のため、“The Thatchers’ Craft” (イギリスの茅葺き職人の bible と言われている) の一部日本語訳を資料本として作成。(情報量が多く、分かりやすい写真及び解説を使用)

2) 作業記録ビデオ

全行程を正確に理解してもらうため、17分のビデオ作品(解説は研究会の塩沢実氏、英語版は制作中)にして、交流会に参加した茅葺き職人に配布予定。希望者には販売予定。

3) マスメディア

日本経済新聞、産業経済新聞、京都新聞、Japan Times、毎日放送(ズームイン朝)、読売テレビ、テレビ東京(ドキュメンタリー人間劇場)に紹介。美山茅葺き研究会メンバー佐伯マギー、佐伯弘が書いた記事は「チルチンびと」、朝日新聞刊 Japan Quarterly に掲載。研究資料として、(財)日本ナショナルトラスト、(財)文化財建造物保存技術協会(JACAM)、日本民家再生リサイクル協会情報紙「民家」INAX Booklet に紹介。

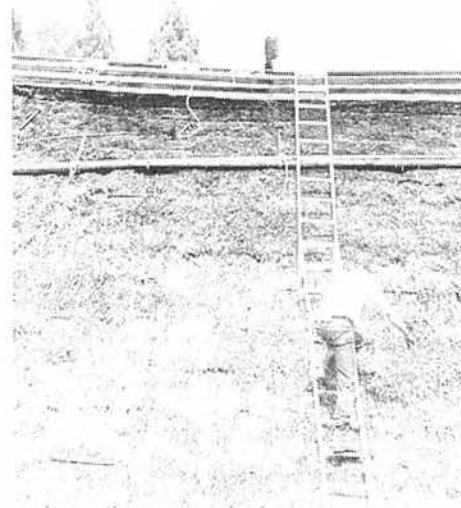
付記：

プロジェクト終了後、新たに押しボコに鉄筋を使用したり、茅を60cmから35cmの厚みに変える試みがなされた。(ヨーロッパでは通気性、経済性、負荷軽減を考慮し、30cmの厚みで葺かれている。)

II. 活動の効果及び今後の課題

住む人に不便な生活を強いてまで伝統的な形態を守ろうとすれば、茅葺き民家は人々の暮らしから切り離され、博物館の陳列物のようにになってしまう。住宅としての民家本来の機能を活かすためには、時代の要請に答えて変化する柔軟さも必要だろう。とは言っても、茅葺きを残すためなら材料や工法、デザインにどのような妥協もやむを得ないということではない。不適当な妥協を受け入れてまで遺されたものは、遺す意味を失いかねないからだ。それを通じて人々の暮らしや知恵、積み重ねられた営みの歴史を見ることができなければ、もはや文化として評価することはできなくなる。

もちろん、縁故関係を中心とした村落共同体や、農本主義経済に基づいた中世的な社会シ



葺き替え前の屋根に登る
ロジャーエバンズ氏

システムを堅持すべきだということではないが、一人の人間の行動半径や交友関係が飛躍的に広がっても、地域社会という認識が無くなったわけではなく、そこから切り離されてしまっは借り物の文化、置物の建築になってしまう。

また、現在では茅葺き民家は一個人の住宅としてだけでなく、景観要素として地域社会＝「まち」の共有する財産でもある。そうであるためには文化として評価されるだけの価値を保つ必要があるし、そうであれば一個人だけの負担と責任によるのではなく、大きく拡がった地域社会の中で茅葺き民家を「生かす」新しいシステムを模索すべきだ。(美山町は補助金という直接的な手法が用いられているが、実際には茅葺きに住んでいるかどうかに関わらず、町民の間で茅葺きの存在が当たり前を受け入れられる共有の認識があることの方がより重要だ) Vernacular (地域特有) な建築の定義は時代とともに変わるだろうが、常に一線を引いておくことは必要であり、どこにその線を引くかということをもっと論議すべきであったと思う。(今回のプロジェクトでこういう話を様々な立場の人としたかった)

新しい茅葺きの在り方を探ろうとしたのであるから、比較できるだけの現状の調査が必要であった。変化に富む日本の風土に適合して多様化した茅葺きを、地域的な嗜好の違いですましているようでは、我々は自分自身のことをまだ知らな過ぎるのではないか。先人たちの積み重ねてきた知恵を継承し、それぞれの持つ意味を理解できなければ、異なる文化と比べることもできない。(今回のプロジェクトでここまでカバーすることはもともと無理だったろう。)



葺き替え作業中

プロジェクトの結果についての個人的な感想は準備不足と言うことだった。様々な人の意見を聞いたかったのだが、こちらの仕掛けたアクションに適当なりアクションが来なくて手詰まりの感があったが、できればアクションを仕掛ける前にプロジェクトの意味や価値についてもっと多くの人と話し合えたら良かった。

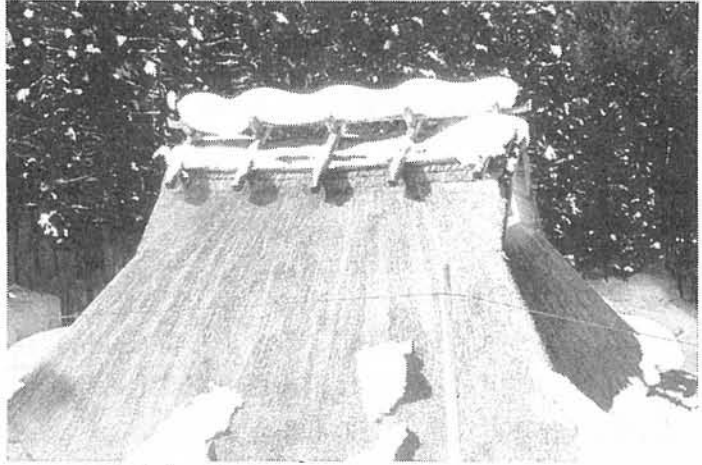
「多くの人」というのが具体的にどんな人達なのかというような検討も、事前にもっとしておくべきだった。例えば一口に茅葺き居住者と言っても、そこで生まれて住んでいる人と、自ら望んで暮らすようになった人とは、(良く解っているかどうかと言うことではなく) パッシブかポジティブかという立場の違いによる考えの違いがあるだろう。職人にしても直接住んでいない人にしても然り。

これらの問題はスタートが遅かった(というか茅葺きの時期が決まっていたし) こともあるし、事務能力の限界もあったろう。今回のように市民運動のようなことをしようとすると常に事務方に過大な負担がかかる。

職人さんたちの印象については、普段全く異なる系統の技術や材料を扱うことになじんでいる人達が多かったので、イギリスの工法もまた、数ある茅葺きの技術の一つとして見ていて、日本のそれと相対的に比較することはしていないようだった。それでも、われわれは新しい選択肢を一つ増やした訳だし、「イギリスのやり方」という言葉で示される共通

の認識を得たことは意味があると思う。

個人的にはプロジェクトに参加できたことは良かった。ロジャーさんと面識をもてたし、イギリスに（限らないけれど）実際に行って、その状況を自分の目で見て考えたいという望みも具体化できるかもしれないようになってきた。プロジェクトの当初期待したような大きな波紋を起こすことはできていないが、波紋が消えたわけでもないし、ゆがんで伝えられることの無いように注意していれば、長い目で見て意義のある一石を投じたと思う。



葺き替え完成后、従来より雪の落ち方が早い